田中秀央先生と日本の西洋古典学

松　平　千　秋

1

田中秀央先生がラファエル・ケーベル博士の門下生であることは多くの人の知るところである。ケーベル博士は，日本の西洋古典学の父と言ってよい人であるが，田中先生は，ケーベル博士が日本の土に蒔いた古典学の種を，発芽させ育て上げた功労者である。

ケーベル博士の出自については，久保勉『ケーベル先生とともに』（東京，昭和26年）の冒頭に，

> ケーベル博士は1848年1月15日，ドイツ系ロシヤ人で実際の枢密顧問官であったグスターブを父とし，マリアを母としてモスコーの東方ヴォルガ河畔の古都ニシニイ・ノヴゴロドに生れた。ケーベル家は元来ドイツのザクゼンから出ており，先生の中のロシヤ人の血はスウェーデン人の血のまじっていた母方から来たものである。1歳にして母君を失った先生は，母方すなはちレヴァールから来たレービンダー家の祖母君のもとで，乳母を雇って育てられた（25頁）。

とある。はじめ音楽家を志すが，性格的に演奏家として立つには不向きであることを自覚し，この道に進むのを断念して哲学の研究に向う。ドイツ各地で当時高名な哲学者たちに師事するが，エルンスト・ヘッケル，クーノー・フィッシャー，エドゥアルト・フォン・ハルトマンなどが，彼の最も敬愛した師であった。このように彼の学者としてのアウスビルドゥンクはすべてドイツにおいて完成したのであるから，その血統とも思い合せて，彼をドイツ系ロシヤ人と呼ぶよりも，ロシア国籍を持つドイツ人と呼ぶ方が一層適切であると言ってよい。

明治26年（1893）ケーベル博士は恩師ハルトマンの推薦によって来日し，東京帝国大学に哲学の講師として赴任する。ケーベル博士は，哲学のほかに，ギリシア，ラテンの語学，文学，さらにドイツの古典文学についても講義を行なった。哲学以外はいわば契約外で，西洋文化の理解の為には西洋古典の知識が不可欠の基礎課目であるとの信念から自発的に行なったものである。

第1図　田中秀央先生遺影
（『西洋古典学研究』23より）

ケーベル博士の講義を聴講した学生の中からは多くの人材が輩出したが，久保氏の前掲の著書では，それらの人々の名を3段階の時期に分けて記してある。古いところでは岩元禎，桑木厳翼，柿崎正治，高山林次郎，波多野精一，続いては石原謙，阿倍次郎，田辺元，安倍能成等があり，著者と同年代では岩下壮一，九鬼周造，和辻哲郎，田中秀央の名が挙げてある。しかしこの内後々まで西洋古典学を専攻したのは著者の久保勉と田中秀央のお二人だけである。

ケーベル博士は学生たちをよく自宅に招いて食事を供した。終生独身であったから，その気安さもあったであろうが，一番の理由は彼が学生を吾子のように可愛がっていたからに相違なかった。そういう時のケーベル博士は，すっかりくつろい

でよく冗談を言い，学生たちをからかって喜んでいたという。

久保は特にケーベル博士に愛され，ドイツ語に堪能であったこともあって，大正の初期からケーベル博士の家に起居するようになり，一種の学僕として彼の身の廻りの面倒を見ること10年にわたった。そしてそれはケーベル博士の逝去の日まで続いたのである。

もちろん田中先生もケーベル邸に出入した学生の一人であった。ケーベル邸に招かれた時の田中先生について，次の様な微笑ましい情景が描かれている。

…ギリシャ語の時間のあった木曜日には，田中君等と一緒に夕食に招かれることも屢々であった。さういふ折にはよく甘党の吾々のために特に注文されたライスプディングが出たが，一応皆が食べ終って，まだ半分位も残ってゐるのを見ると，先生は大の甘党の田中君にイート，イートと云って勧められ，田中君の方でもにこにこしながら素直にそれをみんな平げるのであった。またそれを見て如何にも満足さうに先生が笑はれた光景が今なほありありと眼前に浮んで来る。田中君はその無邪気で素朴な性質と素直に先生の指導に従って，脇目もふらず古典語の研究に専念してゐたので先生の気に入っていた(久保，前掲書，88～89頁)。

田中先生は，卒業後もケーベル邸をよく訪問されていたようで，御長女の悠紀子さん（山岡京大名誉教授夫人）のお話によると，先生に連れられてケーベル先生のお宅へ伺った，ということである。田中先生は，大正3年に結婚しておられるので，令嬢を連れてケーベル邸を訪ねられたのは，ケーベル博士が東京大学を退職した大正4年以後のことで，横浜の友人宅に寄寓していた時期に違いない。

ケーベル博士は21年の長きにわたり，しかもその間一度も中断することなく，東京大学の教壇にあったが，大正3年（1914）に大学との契約期限が切れて帰国することになった。しかるに出発直前第一次世界大戦が勃発して帰国の望みを絶たれることになる。友人のロシア領事の官邸に寄寓し，1923年6月逝去するまで終にこの仮の住居を離れることがなかった。運命のいたずらという外はないが，帰国を果せず異国の土となったことが，ケーベル博士にとって不幸であったとは必ずしも言えぬように思う。彼には家庭がなく，在独中に得た恩師や友人たちの多くは，既に他界していたでもあろうから，他国とはいえ多くの忠実な門下生に囲まれて世を去ったのは，むしろ幸福な生涯であったのかも知れない。

第2図　新村出先生還暦祝賀会
前列　中央：新村先生，左から3人目：田中先生，新村先生の右：鴛淵一先生，その次：泉井久之助先生
後列　左から2人目：筆者

2

田中秀央先生は，明治19年（1886）3月2日，愛媛県北宇和郡三浦村で，田中精一郎，みねの四男として誕生された。田中夫妻には四男一女があったというから，先生は男子としては末子であったわけである。入学された小学校は三浦村立大内小学校と言い，中学校は宇和島中学（今日の宇和島東高校）であった。ついで京都の第三高等学校に進学，明治39年に卒業，東京帝国大学文科大学に進まれた。42年に卒業，大学院を経て45年同大学の講師に就任，古典語を教えられた。大正9年（1920）7月，京都帝国大学文学部講師として招かれて京都へ赴任，同年11月には早くも助教授に昇任されている。大正11年から約2年間，文部省在外研究員として渡欧，主として英国において西洋古典学を研究，13年に帰朝せられた。

昭和5年，文学博士，次の年に文学部教授に任ぜられた。その後西洋文学第二講座，梵語学梵文学講座の分担を経て，13年には西洋文学第二講座担任となり，事実上わが国最初の西洋古典学・西洋古典文学の講座が開設されることになった。

21年3月を以て停年退官，その後は京都女子大学に教授として就任，49年米寿を迎えられた機に退職されたが，同年8月6日に逝去された。

京都大学在職中に叙勲3回（四等，三等，二等の瑞宝章），ギリシア政府から勲章授与2回，またアテネ大学からは名誉博士の称号を贈られている。

以上が田中先生の生涯の概略であるが，幼年時代から三高，東大における勉学時代にわたって，今日我々が具体的に知り得る所は殆どない。当時先生と親しかった方々は，既に故人となっておられるし，また先生は，我々後輩に御自分のことを語られることは稀であった。先生は謹厳で酒も煙草も嗜まれなかったので，酒席で思い出話を伺うような機会などもなかったという事情もある。ケーベル博士の許で学んでおられた頃は，前に掲げた同門の人々との間に交友関係があったことはいうまでもないが，それらについても有力な資料が残っていないのは遺憾である。市河三喜，土居光知のお二人とは，ほぼ同年輩であったこともあり，特に親しくしておられたようであるが，いずれも既に物故しておられる。山岡夫人のお話では，先生御自身が書き残されたノート風のものがあったということで，探して見付かったならば見せて頂けるはずであったが，本稿を草するのには遂に間に合わなかったのは遺憾である。

京大に移られてからのことも，筆者は漸く昭和10年に入学した者であるから，それまでのことは先輩たちから折々に伺った断片的知識しかない。前述の如く先生が昭和6年に教授になられた時に西洋文学第二講座分担を命ぜられ，同8年には梵語学，梵文学講座をも併せて分担されるようになるが，これは本来先生が坐られるべき西洋古典語学・西洋古典文学講座がまだ開設されていなかったための便宜的措置で，西洋文学第二講座というのは英文学のための講座である。それが昭和13年に，上の二講座の分担を免じ，西洋文学第二講座担任を命ずという辞令が降りたのは，文学部教授会が西洋古典語学・文学を講座外正科として開講することに決したためで，翌14年から専攻学生を収容し得る独立科目となったのである。この措置は西洋古典を重視した京大文学部の英断によるものであったが，田中先生の多年にわたる研究及び教育における実績が，その最大の原動力となったことは言うまでもない。先生退官後は筆者が講師，ついで助教授としてこの科目を担当したのであるが，事実上独立したと言っても，正式の講座として認可されたものではないので，言うなれば他講座に寄食している状態でこの科目は存続していたのである。

西洋古典語学・西洋古典文学の講座が正式に開設されたのは，漸く昭和28年になってからである。この間田中先生初め，退官・現職の教官が講座開設に尽瘁されたようであるが，中でも天野貞裕先生の努力によるところが最も大きかったと聞いている。元文部大臣であった先生の影響力が強く働いたであろうことは，容易に推察できる。後年東京大学文学部にも西洋古典の講座が新設され，今日独立の講座を持つのはこの二大学のみである。

昭和25年には，日本西洋古典学会が結成され，学会事務は京大の西洋古典研究室が主として担当し，研究発表会の開催，学会誌の編集を行なって今日に至っている。ケーベル博士によって蒔かれた西洋古典学の種子が，田中先生によって育てられ，ここに漸く枝葉を拡げて来たと言ってよかろう。

3

田中先生の業績は多方面にわたり，また数も多いので，ここに一々挙げることは難しい。

著書としては，ギリシア語，ラテン語の文典，教科書，辞典の類，また文学史などがある。我国における西洋古典学の先駆者として，先ず啓蒙的，教育的な面を重視せられたのは当然であった。筆者が古典語を学び始めた頃は，ギリシア語では先生の*Grammaticae Graecae Rudimenta*（東京，昭和2年）が，ラテン語では*Nova Grammatica Latina*（東京，昭和4年）が最も権威ある文法書とされ，我々もこれによって学んだものである。ギリシア語文典は文法用語が全部英語で記されており，従って我々年代の者は，後々まで文法の術語を英語で言う習慣がついたほどである。ラテン文典では邦訳が試みられているが，それらは試訳の域を出ず，今日でも比較的広く用いられているのは，deponentの訳語である『形式所相動詞』くらいであろ

う。ギリシア文学史は2種あり，一つは井上増次郎との共著，他は黒田正利との共著に成る。後者（東京，昭和14年）は700頁を越える大著で，我国における最初の本格的なギリシア文学史と言ってよい。ラテン文学史は先生おひとりの著述で，昭和18年に生活社から刊行された。後に触れる同書店刊行の『ギリシア・ラテン叢書』の第一冊目に当る。

辞典類では，羅日辞典（*Lecicon Latino-Japonicum*）（東京，昭和27年）と落合太郎共編の『ギリシア・ラテン引用語辞典』（東京，昭和12年）がある。いずれも今日も尚広く利用されている辞書である。

訳書は約30冊を数える。ギリシア・ローマの古典作品のものが多いのは当然であるが，近代の学者による研究書の翻訳もある。注目に値するのは，初期の作品にローマ法関係の原典訳が3冊もあることである。いずれも末松謙澄共訳のもので，当時高名の法学者が古典語の専門家を協力者に望んだ結果であろう。『ユスティニアーヌス帝欽定羅馬法提要』（東京，大正4年），『ガーイウス，羅馬法解説』（東京，大正6年），『ウルピアーヌス，羅馬法範』（東京，大正6年）がそれである。後年京都女子大学在職中に発刊されたマグナ・カルタの訳註（京都，昭和33年）も，遙かにそれに繋る業績であろう。また古典以外のものとして，浜田耕作，泉井久之助，長沢信寿らと共訳の『サンデ，天正年間遣欧使節対話録』（東京，昭和17年）がある。

近代欧米の古典学者による著述の翻訳としては，『ブッチャー，ギリシア精神の様相』（和辻哲郎・寿岳文章共訳，東京，昭和15年）が最も広く読まれ，古典専攻者のみならず，近代文学の研究者をも裨益するところが大きかった。

ギリシア・ローマの古典作品の翻訳が最も多いのは勿論であるが，ギリシアではホメーロス（越智文雄共訳『イーリアス』上巻〔東京，昭和24年〕；松浦嘉一共訳『オデュッセイア』上・下〔東京，昭和14年〕），悲劇作家（内山敬二郎共訳『アイスキュロス，悲壮劇』〔東京，昭和18年〕；内山共訳『ソポクレース，希臘悲壮劇』〔東京，昭和16年〕，内山共訳『エウリーピデース，希臘悲壮劇』〔東京，昭和24年〕）ほかにクセノポーンの小篇数冊などがある。

ローマ作家のものとしては，木村満三共訳『ウェルギリウス，アエネーイス』上・下（東京，昭和16年）；越智共訳『ウェルギリウス，田園詩，農耕詩』（東京，昭和21年）；黒田正利共訳『ホラーティウス，詩論』（東京，昭和2年）；村上至孝共訳『ホラーティウス，書翰集』（東京，昭和18年）；泉井久之助共訳『タキトゥス，ゲルマーニア』（東京，昭和7年）；角南一郎共訳『キケロー，義務について』（東京，昭和34年）などが挙げられる。

訳書のほとんどが共訳であることについては，『自分は文章に自信がないから』と先生が洩らされたのを聞いたことがあるが，そのような配慮をなさる必要はなかった，と筆者は思っている。先生としてはそういう理由ばかりでなく，若い門下生を引き立てるお積りもあったのであろう。共訳者はいずれも古典に関心のある人々ではあったが，古典語の知識については必ずしも専門的な学力を具えていない場合が少なくなかった。近代語訳から重訳された原稿を，先生が原典と照合しつつ訂正加筆されたようである。先生の原典翻訳に臨む態度は極めて厳格で，一語一句もおろそかにはせぬという風であったが，そのために共訳者の側では不満を抱く場合もままあったようである。筆者が記憶するところでも，ある人が原典に『盾と槍』とある所を順序を逆にしたというので憤慨しておられるのを見たことがある。先に挙げた『ギリシア・ラテン引用語辞典』は落合太郎先生との共著であるが，これは田中先生が先に原典から訳されたものを，落合先生が添削なさるという方式であったらしい。いつか落合先生が私共に，『僕が切角直したところが，戻って来たゲラを見ると元のままだった』と笑いながら話されたことがあった。お二人は気心の合った友人同士であったから，それで済んであろうが，恩師に遠慮せねばならぬ後輩の場合には，多少鬱屈した気持が残るようなこともあったのではないかと想像される。

戦時中の末期に生活社という出版社が，ギリシア・ラテンの古典叢書を計画し，採り上げるべき作品と翻訳者の選定を田中先生に一任した。先生は数人の古典学者を集めて協議され，昭和18年に先生の『ラテン文学史』を皮切りに，続々と重要な古典作品の訳書が刊行された。この叢書の刊行は戦後まで続いたが，間もなく出版社が経営不振に陥って中断の止むなきに至った。しかしその間，青木厳『ヘロドトス，歴史』上・下（東京，昭和15年，16年）；同氏『トゥーキューディデース，歴史』上・下（東京，昭和17年，18年）同じく青木

氏の『プルターク英雄傳』（東京，昭和22年）；村川堅太郎『エリュトゥラー海案内記』（東京，昭和21年）；森田慶一『ウィトルーウィウス，建築書』（東京，昭和18年）などの大作を含め10点に余る原典訳が完成し，学界に貢献する所が大きかった。

4

田中先生の人となりについては，先に引用した久保氏の著書からの一節――ケーベル邸に招かれた先生が，ライス・プディングをすすめられるままに平げる場面が，実に良くその真面目を示している。多年にわたって先生に師事してきた筆者の如きは，その場の先生のしぐさまで眼前に見る想いがするほどである。先生の天真爛漫ともいうべき卒直さは，恐らく天性のもので，幼年時代から生涯を通じて持ち続けられたものであった。先生の人生観は極めて単純明快なものであったから，それに抵触する行為に対しては容赦するところはなかった。筆者は先生から面と向って叱責されたことは余りなかったが，一つだけ今でも強く記憶に残っていることがある。学生時代ギリシア語の講義を受けていた時のことである。教科書は多分クセノポーンの『アナバシス』であったと記憶する。受講生は筆者一人で，第一時限の授業であった。当時は午前8時始業であったから，夜更しの癖のある若者には辛い授業であった。当時北野に住んでいた筆者は，どうやら既に幾度か遅刻して先生を苛立たせていたものと見える。先生の研究室に入るなり，先生は声を荒げて度重なる遅刻を責められ，こちらは恐れ入ってひたすら宥恕を乞うしかなかったのである。

先生が時間に厳格であったことは人々のよく知る所であった。授業のあるなしに拘らず，先生は毎日午前8時前には必ず研究室に来ておられた。文学部の教授諸公の大方は，授業日以外に研究室に来られることは稀であったから，先生などはむしろ異例の存在であった。この時間についての厳格さは，家庭生活においても――というよりむしろ家庭では相手がお身内であるために一層甚しかったものと想像されるる。夫人はじめ御家族の御苦労がお察しできるように思う。恩師のケーベル博士も日常の生活が極めて規則正しかったことは知られている。『カント程ではなく，また神経質に努力した結果でもなかったが』ケーベル博士の一日は判を押したように規則正しかった，と久保氏は記している。田中先生はケーベル博士よりも少しく『神経質』であったのかも知れない。ケーベル博士との比較ということになると，もう一つある。ケーベル博士は酒と煙草もほどほどに愛好した人であった。むしろエピキュリアンと言ってもよい，とは久保氏の評言である。同門の美学者深田康算の言葉として『ケーベル先生の中のエピキュリヤン風なところは僕が承け維ぎ，ストイック風なところは久保君が承けついだ』と久保氏は書いているが，田中先生は久保氏と共にストイック風なところを継承されたわけである。先生がいつか外出先で大変咽喉が渇いて，出されたビールを一口飲み，ビールがこんな旨いものだとは知らなかった，と言われたという話をある先輩から聞いたことがあるが，真偽のほどは定かでない。

また，ある時先生から頂いた葉書の終りに，Festina Lente とあるのを見て，一寸ショックを受けた記憶がある。『ゆっくり急げ』というラテン語の格言であるが，この時は特に自分に対して先生が警めのために書かれたものと思って考え込んで終ったのである。ところがこれはケーベル博士が愛用した格言で，田中先生がそれを継承されたものに相違ないのであるが，いつの頃からか，通信文の終りに『敬具』代りに常用しておられたことが判った。特に筆者宛の訓戒ではないことも知って一安心したのであったが，そう言えば先生には気短かな一面が確かにあった。授業の際，黒板で書き間違いをされると，手近にある黒板消しは用いずに，指で消すのが先生の癖であった。それもかなり強烈な勢いで黒板をこすられるので，シュッシュッという音がいまでも筆者の耳底に残っているほどである。先生はこの句を自戒の意も籠めて用いておられたのかも知れない。

先生は，昭和49年8月6日夜逝去された。享年88才であった。葬儀は同月8日に南禅寺の塔頭帰雲院において行なわれた。当日の朝はむしろ肌寒いほどの爽涼さであったが，日中は流石に暑くなった。葬儀は午前10時半に始まり正午に終わった。筆者は葬儀委員長の大役を仰せつかり，霊前に弔辞を捧げたが，その中で先生が生前着用しておられたケーベル博士から拝領の外套に触れ，この古ぼけた外套こそが，日本の西洋古典学の発祥と発展を示すシンボルであった，と述べた。

先生のお墓は帰雲院の墓地にある。

後記　数ケ月前角田さんから電話で，田中先生について執筆するように依頼され，お引受けしたのであったが，後から考えて見ると，私が師事してから以後のことはともかく，私が先生について知っていることが余りに貧しいことに気付いて愕然とした。今更御辞退もできかねるので，出来る範囲で調査をして執筆にかかる心積りをしたのであるが，本文にも記したように，今となっては既に手遅れであることが判った。御長女の山岡夫人を煩わして，御生家のことや東京時代，京都時代の交友関係，家庭人としての先生の一面などについて御教授頂いたが，結局は大変不十分なことしか出来なかった。この点角田さんはじめ平安博物館の方々，また田中先生の霊や，御遺族に対しても誠に申訳なく，ここに深くお詫び申し上げる次第である。

（京都大学名誉教授・京都産業大学教授）